

氏 名	いしむらとも 石 村 智
-----	-----------------

(論文内容の要旨)

本論文「ラピタ人の考古学—人類のオセアニア島嶼環境への適応戦略とその社会を探る研究—」は、オセアニア地域にかつて存在したラピタ人についての考古学的研究の成果である。

ラピタ人とは、人類史上初めてリモート・オセアニアの海洋世界の島嶼環境に拡散・適応した集団である。彼らはおよそ3,000年前に、パプアニューギニアのビスマルク諸島から西ポリネシアまでの広大な範囲に突如として現われて広がったが、わずか数百年後には彼らの考古学的痕跡はほとんどみとめられなくなってしまった。しかし彼らはその姿を消してしまっただけではなく、定着した地域ごとに独自の道をたどり、現在のメラネシア島嶼部の人類集団およびポリネシア人へと変容していったと考えられる。

彼らはラピタ土器と呼ばれる独特の装飾土器をはじめ、石斧・貝斧などの道具を製作・使用したが、金属器を製作する技術は持たなかった。彼らは巧みな航海能力を持ち、それによってオセアニアの島嶼域に拡散することができたと考えられる。また彼らは、島嶼間で長距離交易のネットワークを築いていたと想定される。彼らはタロイモ・ヤムイモなどの根菜や、ココヤシなどの有用植物を栽培する農耕技術（栽培農耕）を持っており、これらを植民した新しい島へ人為的に持ち込んだと考えられる。また、ブタ・イヌ・ニワトリなどの家畜も飼育し、これらも人為的に導入したと考えられる。こうした導入種に加え、ラピタ人は魚・ウミガメ・貝類などの海産資源を利用し、それらの遺存体は貝塚のなかに残されている。言語学的にラピタ人はオーストロネシア語族の言語集団の一派と考えられており、人類学的にもモンゴロイドの一派に属し、その起源は台湾および東南アジア島嶼部に辿ることができると考えられる。また日本列島の縄文人との関連も想定されている。

しかしラピタ人についてはまだ不明な点が多い。例えば、彼らはなぜ危険を冒してまで海を渡り、オセアニアの島嶼世界に拡散していったのかについては、十分な

説明はされていない。また、彼らの生業は栽培農耕が主体だったのか、それとも海産資源の獲得経済が主体だったのかも議論が分かれる。さらに、ラピタ人が実際どのような人種であったのかという形質人類学的な性格についてもほとんどわかっていない。こうした問題を解決するには、人類学的・生態学的な見地から彼らの適応戦略を評価する一方で、現地調査によってそれを実証的に検証していくという作業を両輪として進めなくてはならない。

筆者は平成12年以来、トンガ王国・サモア独立国・フィジー諸島共和国などで考古学的現地調査をおこない、ラピタ人の遺跡を実際に発掘し、出土資料を分析してきた。本論文の基礎的なデータは、こうした調査によって収集されたものに基づいている。

以下、章ごとにその内容を記す。

第1章の「イントロダクション」では、本論文の目的およびバックグラウンドを説明している。本論文では、筆者が実際に調査をおこなった「東ラピタ地域」（フィジー・トンガ・サモアを含む範囲）のラピタ遺跡を研究対象に設定し、特にフィジーのラピタ遺跡について中心的に研究をおこなった。

第2章の「ラピタ人の起源」では、ラピタ人の起源問題についての言語学・考古学・人類学のこれまでの先学の研究成果を概観・整理した上で、それらを総合的に評価し、やはりそのルーツを台湾周辺地域にもとめるのが妥当であると判断した。しかし従来の理解のように台湾からオーストロネシア語族の言語集団が一方向的にオセアニアへ拡散してきたのではない。その前段階に既に東南アジア島嶼部およびその周辺地域に新石器文化が分布しており、それらを包括する交流圏が成立していた。そうした文化的基盤を前提として台湾から東南アジア島嶼部を経由しオセアニアにいたる人と文化の双方向的な流れがあり、さらにオーストロネシア語がこれらの地域間での海上交易における交易用言語として広く用いられた可能性を示した。つまり、必ずしも言語の拡散と人類集団の移動とは一致しないのである。

第3章の「ラピタ人の文化と社会」では、ラピタ人の物質文化、生業および社会構造について、これまでの考古学の先学の研究成果に沿いつつ、批判的検討を加え

て叙述している。特に、物質文化の中でも土器に次いで重要な石斧および貝斧については、カヌーを製作する加工具として適応した形態を示すことを指摘した。また遺跡から出土する動物遺存体からラピタ人の食物資源利用を復元すると、海産資源に大きく依存していることがわかった。こうしたことから、ラピタ人の文化や生業は海と深く結びついていることが示された。

第4章の「ラピタ文化複合の編年」では、ラピタ人の文化の特徴的な遺物であるラピタ土器を分析し、それを編年的・地域的に配列することで、ラピタ人の文化史を理解するためのフレームワークを設定した。各地域のラピタ遺跡から出土した土器をくまなく検討するため、報告書で公表されている資料のみならず、未公刊資料も可能な限り参照した。これによって各地域のラピタ遺跡を時期的に比較するための編年表を提示することができた。土器の文様・器形の時間的な変化を眺めると、文様は具象的なものから単純なものへと変化し、器形は複雑なバリエーションのものから単純なものへと変化することが示された。こうした土器のエラボレーション（精緻さ）の低下は、島嶼間の遠距離交易の衰退と関連があり、背後にはラピタ文化複合自体の解体のプロセスがあることを指摘した。

第5章の「フィジー・モツリキ島の考古学的研究」では、モツリキ島のラピタ遺跡・ナイタンバレ遺跡について筆者がおこなった土器の編年研究と遺跡立地の分析を示した。この遺跡では、ラピタ期にはじまり、それ以降3,000年にわたる重層的な文化層が確認されており、複数の土器伝統が存在することが確認された。それらを型式学的・層位学的に分析し、編年をおこなった。さらに先行研究によるフィジーの土器編年と比較することで、その編年がフィジー全体の土器編年に応用可能で、かつ従来の編年より精緻なものであることを示した。また遺跡自体の性格に関して、古地形の復元といったジオ・アーケオロジー的手法や、動物遺存体の分析を通じ、海洋へのアクセスを重視した立地に営まれたことを述べた。さらにこの遺跡から出土したラピタ人骨の分析結果を示し、特に安定同位体分析の結果からは、この人物が生前、海産物を多量に摂取していた可能性を指摘した。

第6章の「フィジー・ボウレワ遺跡の考古学的研究」では、現在筆者が調査を継

続しているボウレワ遺跡を例に集落遺跡の特性を述べた。この遺跡出土のラピタ土器は古い様相を示し、様式的にも西ラピタ地域との類似性を示す。放射性炭素年代においても東ラピタ地域で最古の年代を示している。さらにこの遺跡からは、3,000キロメートル以上離れたビスマルク諸島タラセア産の黒曜石が出土している。こうしたことからこの遺跡は、初期居住や長距離交易の問題を考えるにあたって最も重要な遺跡の一つである。この遺跡の立地については、現在ではビチレブ島の海岸部に位置するが、かつてそこはビチレブ島から分離した小島であったと考えられることから、この集落遺跡も海洋資源へのアクセスを重視していたことが想定される。またボウレワ遺跡の周辺には複数の小規模遺跡が存在するが、これらはボウレワ遺跡をとりまく衛星集落であったと考えられ、拠点集落と衛星集落が有機的に結合したセトルメントのあり方を想定することができた。

第7章の「フィジー・ヤンドゥア島の考古学的研究」では、ヤンドゥア島で新たに発見した遺跡の考古学的調査について示した。ヤンドゥア島はこれまでラピタ遺跡がほとんど見つかっていないバヌアレブ島に近接する離島であるが、発掘調査の結果、少量のラピタ土器を出土する遺跡を発見した。この遺跡もサンゴ礁のリーフに囲まれた海岸平野に立地し、海洋資源へのアクセスを重視するというラピタ集落の立地条件に合致するが、土器が出土した文化層は崩落土による二次堆積であり、ラピタ時代の確実な文化層を確認するには至らなかった。

第8章の「東ラピタ地域の編年的検討」では、第4・5章の土器編年をもとに、フィジーおよび東ラピタ地域におけるラピタ遺跡の編年を示した。これによって東ラピタ地域におけるラピタ人の拡散と定着の具体的様相を見ることが可能となった。この地域におけるラピタ人の拡散ルートは、フィジーからトンガを経てサモアに至るルートと、フィジーからフツナ・ウベアを経てサモアに至るルートを想定することができ、それらはサモアで結合してひとつの大きな輪をつくることがわかった。これらのルートは一方的なものではなく、トンガのタファヒ産黒曜石がフィジーのラウ諸島で出土するなど、逆方向への還流もあったことが伺われ、その背後には東ラピタ地域を包括する交易網があったことが示唆される。

第9章の「威信財システムからの脱却」では、ラピタ人の社会構造を読み解くカギのひとつである威信財システムを検討するために、トロブリアンド諸島・トンガ・ハワイの三つの地域の民族誌における威信財のあり方を比較研究し、モデル化をおこなった。威信財システムとは、首長が長距離交易によって獲得した威信財を、共同体の内部に再分配することで、社会秩序の再生産をおこなうという社会システムのことである。比較研究の結果、威信財システムから「脱却」することにより、むしろより高度な階層化社会が達成できるという図式を示した。このモデルに照らし合わせることで、ラピタ人の社会では威信財システムがよく発達していたが、社会の階層性は比較的低いものであったと評価することができた。このモデルは他の地域の首長制社会や国家形成論の検討にも適用でき、例えば弥生時代・古墳時代の日本列島にも適用可能であると考えられる。

第10章の「適応としてのラピタ人の拡散戦略」では、ラピタ人の拡散のユニークさを人類史的に評価しようと試みた。ラピタ人の拡散スピードはまれにみる速さであり、まさに移動する民族といっても過言ではない。またラピタ人は島嶼間で遠距離交易をおこなっており、それが社会に埋め込まれた活動であったと考えられる。さらにラピタ人の生業や資源利用戦略を検討すると、彼らは最小限の効率性で最大限の生産性を得ようとする「r戦略者」と理解できる。この戦略は、定住・農耕社会に特徴的な、効率性を高めて生産性を向上させようとする「K戦略」と対極をなす適応戦略である。つまりラピタ人は資源が偏在する島嶼・海洋世界を「移動」し続けることで効率よく資源を獲得するという社会形態を採用しており、これはいわば海に生活の中心を置いた「海人文化」として位置づけることができる。

第11章の「人類の海洋世界への適応」では、海洋世界へ完璧に適応したラピタ人の人類史的な位置づけを総合的に検討し、「移動する民」あるいは「海人」こそ、人類史のなかでより「進化」した形態であると評価する。同じように海洋環境に適応したオホーツク人・八丈島の縄文人の事例と比較し、あるいは同様に移動生活が主体である「遊牧民」についても参照すると、これらの社会がむしろ「定住的」な社会から発達した結果であることを示す。なぜなら、これらの社会の成立に先立つ

て農耕社会の存在もしくは農耕・栽培技術の確立が前提となっており、社会の「進化」の過程において農耕社会よりも後出するものだからである。そして「移動」から「定住」へという従来の人類史的理解から、「定住」から「移動」へという理解へのパラダイム転換を提示した。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、今から3,000年以上前に、メラネシア・ビスマルク諸島から西ポリネシアのサモアへと拡がったラピタ人について、考古資料に基づき、彼らの生業と社会、拡散の年代と様相を論じたものである。さらに、ラピタ人がリモート・オセアニアの海洋世界に最初に居住・適応した集団であったことから、彼らの海洋世界への適応戦略を人類史の中に位置づけようとした論文である。

本論文の最大の特徴は、論者自身が、平成12年以来、トンガ王国、サモア独立国、フィジー諸島共和国で現地調査を行い、ラピタ人の遺跡を発掘調査し、出土資料を分析してきた点にある。このような考古学的な手順を経てなされた、この地域での日本人の研究はこれまで皆無であった。また、元となった論文のうち、4本は英文で書かれたもので、海外からの評価も高い。

上記のような特徴以外に、独創的な論点は以下の5点である。

(1)ラピタ人、ラピタ文化とは、その独特な土器により定義されている。そのラピタ土器は独特の文様、特に施文技法に特徴があり、細片でも同定できる。しかし、遺跡から発見されるラピタ土器は細片が多く、ラピタ土器の編年、細別は困難とされてきた。論者は、自らの発掘資料に基づき土器文様の全体像を復元し、文様の変遷を型式学的に定めて、その他の遺跡から出土した土器との比較を行い、フェイズ1からフェイズ3の3期に大別するラピタ土器編年を完成した。この土器編年から見ると、フェイズ1段階の土器はビスマルク諸島を主とする極西ラピタに限られことがわかった。

(2)フィジー、トンガ、サモア等からなる東ラピタ地域では、フェイズ2、フェイズ3を合わせ、早期・前期・中期・後期東ラピタ段階の4期に細分が可能であり、この細分によりラピタ人の段階的拡散と定着、交易の時期的変遷の具体的様相を明らかにした。

(3)ラピタ人はタロイモ・ヤムイモなどの根菜や、ココヤシなどの有用植物を栽

培する農耕技術を持っており、ブタ・イヌ・ニワトリの家畜を飼育し、生業は栽培農耕が主体であったとする考えと、魚・ウミガメ・貝類の海産資源の獲得経済が主体であったとする考えとが対立していた。論者は、自ら調査した遺跡から出土した動物遺存体の分析からラピタ人の食料資源利用を明らかにし、また、ラピタ人の集落が海洋へのアクセスを重視した立地に営まれていたこと、論者らが発見したラピタ人骨の安定同位体比分析で明らかになった、生前に海産物を多量に摂取していたという結果から、ラピタ人の生業は海産資源に重きを置いたものであったことを実証した。

(4)ラピタ文化を特徴づけるものの一つに、長距離交易がある。土器の胎土分析や黒曜石の原産地同定により、土器、黒曜石、石斧が長距離の島嶼間で移動していたことが考古学的に知られている。このような器物は威信財として扱われており、長距離交易は母集団(ホームランド)と植民集団との紐帯によるものとの考えが有力である。論者は、ラピタ社会の威信財システムについて、黒曜石の交易が早く衰退し、土器文様の共有関係の衰退と文様の退化はやや遅れることを明らかにした。既に黒曜石の交換が縮小したフェイズ3におけるさらなる土器文様の衰退は、ラピタのアイデンティティーの崩壊を意味し、この地域の社会が、威信財システムから「脱却」し、ラピタ期以降のより高度な階層化社会へと変化したと述べる。

(5)以上を踏まえて、論者は、ラピタ人の拡散のユニークさは、資源が偏在する島嶼・海洋世界を「移動」し続けることで、効率よく海産資源を獲得するという戦略を採用したことによるとする。

以上の論点は、考古資料に基づく考古学的研究方法による成果として、(1)～(3)が高く評価できる。特に(1)は英文の論文であり、海外でも論者のラピタ土器編年は評価されている。また、ラピタ人の拡散が、農耕技術を保持しながらも、生産性よりも効率を重要視した、略奪的な海産資源利用法を採用したことによる、とする(5)も大変興味深い結論である。

しかし、検討を要する点もある。この地域での考古学はいわゆるアメリカ型の考古学、人類学としての考古学であり、民族学の成果との関わりが密である。第9章

から第11章はそのような視点に立つ内容であるが、第8章までの考古学的研究と比べて論の展開に飛躍が見られる。民族学の成果との比較には、さらなる方法的な検討が必要と思われるが、このことが、論者の詳細な考古学的研究の評価を損なうものではない。この点は、論者の今後の研究の深化に期待すべきである。

以上審査したところにより、本論文は博士(文学)の学位論文として価値あるものと認められる。なお、2009年1月29日、調査委員3名が、論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問をおこなった結果、合格と認めた。